

2025 年度授業アンケートについて

0 はじめに

本学の FD 委員会は授業改善を目的に LMS 上で年 2 回の授業アンケートを実施しています。今回のレポートは、①「学科ごとのアンケート結果の分析と授業改善に向けた課題の報告」と、全学的に実施された②「女性とキャリア I・キャリアデザイン I に関する学科ごとのアンケート結果の分析と授業改善に向けた課題の報告」をもとに、総評を付すかたちでまとめたものとなります。①によって学科ごとの特性や課題を浮き彫りにし、授業改善の方向性を示すとともに、②によって同タイプの授業における学科ごとの共通点と相違点を明らかにし、科目のコアとなるカリキュラムと学科の特性を踏まえたバリエーションの設定を再検討する一助としたいと思っております。また、このレポートは HP にて社会に講評するものでもあることから、学生とのコミュニケーションを通じた授業改善に係る本学の取り組みについて、広く社会の批判を受けるものであり、このようなより広範なコミュニケーションを通じて本学の社会的意義を高めるための礎でもあります。みなさまのお力を拝借できることを衷心より願って止みません。

本レポートの構成は、最初に総評を示し、次いでアンケート結果に基づくレポートを示すという順序にしております。ご高覧の程何卒よろしくお願い申し上げます。

1 総評

学生の評価はおおむね良好であり、教員も学生に応じた適切な対策やきめ細やかな対応だけでなく、学生が理解しづらい意図や対応できない理由について説明しようとしており、より良いコミュニケーションが目指されていることが伺えた。しかしながら、そこに顕在化していない問題が伏在している可能性もあろうし、また、ともすれば学生に迎合する授業内容になってしまっている懸念もあろう。

顕在化している問題としては、アンケート回収率が低い傾向にあることが挙げられる。したがって、最終授業内実施の義務化やそのような実施を円滑に実現するためのアンケートのスリム化など、何らかの対策が必要である。一概には言えないが、アンケートでの高得点の一因として、低い点数をつけざるを得ない理解に苦しんでいる層がアンケートすら面倒だとしてこれに答えていないということも挙がってくるかもしれない。それでは、学生の現状を可視化できていないことになってしまう。

アンケート結果に基づくレポートの体裁については、今後ある程度標準化する必要もあるだろうが、まとめ方の違いをまああたりにすること自体がアンケート分析に関する教員の学びの機会ともなる可能性に鑑み、これで良しとしたい。ただし、アンケートを受けてどのよ

うに授業改善を行うか、という視点を盛り込むことに関しては統一を図る必要があろう。

授業アンケートが〈学生とのコミュニケーションを通じて授業改善に繋げること〉において大きな役割を担っていることは今更言うまでもないが、その機会は半年（1年）に1回に限定されていることに鑑みても、リアクションペーパーや Google フォーム（による学生の意見のインプットと、それに対する返答というアウトプット）などを通じた日々のコミュニケーションを通じて細めにフィードバックすることにより、学生との信頼関係を醸成し、こちらの意図を理解してもらうということ（日々のインフォームド・コンセント）も欠かしてはならないことを指摘しておきたい。

（以上、文責：勝西良典 [2025 年度 FD 委員会委員長]）

2 アンケート結果に基づくレポート

①学科ごとのアンケート結果の分析と授業改善に向けた課題の報告

・英語文化学科

【基礎科目】

批判的なコメントはなく、大半の項目が「4」「5」であったため学生の側で大きな不満はなかったようである。シラバス上予定していた教科書の範囲をすべて終えることができなかった科目もあるため、学生の理解度を確認しながらペースを上げる工夫が必要となる。今年度から TOEIC の内容を取り入れた科目もあったが、学生のボキャブラリーが足りないため、来年のボキャブラリービルディングの内容を取り入れることも検討しなければならない。

【専門講読科目】

批判的なコメントはなく、大半の項目が「4」「5」であったため学生の側で大きな不満はなかったようである。学生にとっては難しい内容のものもあったが、もう少しペースをあげてより多く読ませるため、来年度は授業の方法について再検討する。

【演習科目】

批判的なコメントはなく、大半の項目が「4」「5」であったため学生の側で大きな不満はなかったようである。テキストが難解なため学生が自主的に解釈することが難しく、教員が説明する時間が多くなってしまった科目もあった。来年度取り扱う作品や授業方法について再検討する。

・日本語・日本文学科

【文学系講義科目】

項目別回答より

おおむね授業に真向きに取り組んでおり、満足度も高かったが、授業の到達目標については 50%程度の達成感に留まる学生もかなりいた科目もあった。したがって、

到達までの段階を明確化したり、学生にとって達成感を感じやすくするなどの工夫が求められる。

自由記述欄より

テキスト読解において、ポジティブな引っかかりだけでなく、ネガティブな感想が出てくるところを取っかかりにすることが重要であることを学ぶことにより、問題解決的思考を通じた関心の持ち方に気づく学生もいた。

・文化総合学科

【講義科目】

項目別回答より

シラバス関連の項目については「3」「4」が多くなっていることから、授業期間中にシラバスの内容を学生と共有しながら、進めていく必要があるようである。アンケート回収率が高くないことから、アンケートの高得点については、積極的に受講した層がアンケートにも協力したことが一因とも考えられる。次年度はアンケート回収率をさらに上げられるよう、対策を講じたい。

自由記述欄より

学習の主体性、資料のわかりやすさ、質問への回答に対して肯定的なコメントがあった反面、スライドの移行スピードについていけないという指摘もあった。

【演習科目】

項目別回答より

アンケート結果から、シラバスを踏まえた事前・事後学修の指示を明確にすること、受講者間のコミュニケーションが特定の人に偏らないように工夫する必要がある。アンケート回収率が高くないことから、アンケートの高得点については、積極的に受講した層がアンケートにも協力したことが一因とも考えられる。次年度はアンケート回収率をさらに上げられるよう、対策を講じたい。

自由記述欄より

発表前のフォロー、教員と学生とのコミュニケーションなど、教員によるフォローに対して肯定的なコメントがあった反面、受講者間のコミュニケーションが特定の人に偏ってしまうという指摘もあった。

・地域創生学科（人間生活学科）

【実験科目】

全体として、学生の満足度・主体性ともに高く、実技科目として良好な授業運営がなされたと考えられる。特に「興味・関心をかきたてる授業」「安全面への配慮」「主体的参加」において高評価が多く、授業内容が学生に前向きに受け止められていたことがうか

がえる。「意欲的・主体的に授業に参加した」「授業内容は興味・関心をかきたてるものであった」「安全面での配慮・指導は適切であった」では、いずれも 75%程度で、学生が安心して積極的に学べる授業であったと考えられる。また、「スキル向上」や「到達目標の達成感」に関する項目でも高評価が多く、実践的能力の向上につながっていたことが、アンケート結果から読み取れる。一方で、各項目に少数ながら低評価も見られた。回答者数が少人数の科目では、そのため 1 名の回答でも大きなパーセンテージとなるが、「授業進度」や「シラバスとの整合性」に関する低評価から、一部の学生には授業の見通しや進行速度が十分伝わっていなかった可能性がある。今後は、各回の到達目標や作業工程をより明確に示すこと、進度に差が出る学生への個別フォローを充実させること、シラバスとの関連を適宜説明することなど、さらなる改善に努めていく必要がある。総じて、学生の学習意欲を引き出し、専門の知識や技術の向上につながる授業として高く評価できる結果となっている科目が多いが、今後も改善を重ねながら、より充実した授業運営を目指していく必要がある。

・食環境マネジメント学科（食物栄養学科）

【より専門性の高い講義科目と実習科目に繋がる講義科目】

学生の「主体的に参加する意欲」が高く、「満足度」も 8 割を超えていた。おおむね 8 割程度の学生が、事前・事後学習および授業は「シラバスに沿った内容」であったと捉えていた。同じく 8 割程度の学生が、「授業内容への興味・関心」を持っており、「学生の質問や発言への対応が適切」と捉えていた。この科目では、毎回、フィードバックシートの提出を行っており、多くの学生が回答している。その中で出た質問は、次週以降の授業内でフィードバックを行っている。学修をさらに深めるきっかけとなる質問も多く、極力丁寧に学生の疑問から学びを展開する時間を割くようにしている。4 分の 3 程度の学生が、「授業の到達目標を達成できた」と考えていた。この科目では、授業最終週に、到達目標に対する自己評価をする機会を設定している。学生によっては厳しい自己評価をする者もあり、妥当な結果とみなせる。本アンケートでは、各質問に「そう思わない」と回答する学生が 1 割前後みられた。授業内でのフィードバックシートでは拾い上げることができていない学修に対する不安や不満をもつ学生がいることを確認することができた。今後は、学修に対する不安や不満が軽減するよう、理解を促す声かけや、疑問や不安が解消できる仕組みづくり（資料提示方法の工夫など）を検討・実施し、改善に努めていきたい。

・子ども教育学科

【教科指導法科目】

模擬授業に向けて、各グループにおいて指導案・指導細案・板書案をじっくりと検討し、

効果的な教材・教具・提示物も工夫して作成している姿が見られた。また、事前学修や事後学修にて、空いている教室で黒板を使いながら何度もリハーサルをしている様子も見られ、よい授業を創り上げようとする意欲はとても高く感じられた。そのような頑張りによって、実際の模擬授業では、どのグループも教師役と子ども役が一体となって楽しくわかる授業を創り上げていた。小学校 1 年生から 6 年生までの授業を順番にやっていったが、回を増すごとに、授業をする側は授業力が高まり、見学する側は授業を観る眼が磨かれていった。子どもの主体性を引き出し、子どもたちみんなで学びを深めていく授業構成の在り方、教師の適切な発問の在り方、個々の児童の活かし方、誤答の取り上げ方、板書の仕方など、模擬授業を通して多くのことを学び、その成果が、学生一人一人の最後のレポートに十分表れていた。素晴らしい記述のレポートも多くあり、実習に行っても大丈夫だと感心させられた。今後も、大学での学びと、実習とを結びつけて、より一層自分の教育観と授業観に磨きをかけ、教師としての資質・能力を高めていく姿勢、よい授業を求める姿勢を大切にしてほしいと期待している。

②女性とキャリア I・キャリアデザイン I に関する学科ごとのアンケート結果の分析と授業改善に向けた課題

・英語文化学科

他学科の受講生とおおむね同様の評点で、学びの多い科目であったことが伺える。一方、自由記述では講師への要望なども見られたので、それらの内容を精査した上で、次年度の授業構成について検討していきたいと考えている。

・日本語・日本文学科

学生にとって有意義な授業であることが確認された。特に、OG の話が強く印象に残るようである。また、輪講かつ外部講師にも担当していただいていることによって多面的な理解が形成されることに意義を感じる学生も散見された。レジュメをデータ化してアップロードしてほしいという要望もあったが、外部講師が多く、著作権の問題もあり、残念ながら応じることはできない。

・文化総合学科

項目別回答より

内容への興味・関心の高さが窺われ、興味・関心に対するフォローがうまくかみ合っていたが、授業内容に対する満足度に関しては「5＝強くそう思う」が減って「4」が増えていたため、授業内容について改善の余地がありそうである。シラバス関連の項目については「3」「4」が多くなっていることから、授業期間中にシラバスの内容を学生と共有しながら、進めていく必要があるそうである。

自由記述欄より

輪講かつ外部講師にも担当していただいていることによって多面的な理解が形成されることに意義を感じる学生も散見された。また、将来に向けての計画性を身につけるという授業の目的を理解したコメントもあった。最終レポートの提出が 15 回目の授業内に組み込まれていることに関して、1 回分の学習機会が奪われているという声もあったので、レポート提出の方法についても再検討したい。

・地域創生学科（人間生活学科）

①成果と高評価点

- ・**活発な交流と目標達成**：受講者間のコミュニケーション機会、およびシラバスに沿った授業進行、について全員から肯定的な評価を得た。また、到達目標の達成感(91.3%)や総合的な満足度(87.0%)も高く、受講意欲を引き出す授業運営が行えた。
- ・**実践的なゲスト講義の有効**：特に、卒業生や専門家によるゲスト講義は、「将来を具体的に考えるきっかけになった」「新たな気づきを得られた」という記述が得られ非常に好評だったことから、学生の将来へのモチベーション向上に大きく貢献したといえる。

②課題と今後の改善点

- ・**配慮と価値観の多様性**：外部講師による講義において、性別に基づいた生き方の提示やジェンダーに関する表現に違和感・不快感を抱いたとの指摘があった。キャリア教育における多様な個性の尊重を踏まえ、キャリア支援委員会は講師との事前打ち合わせやテーマ設定をより慎重に行う必要がある。
- ・**他科目との内容重複の解消**：「他授業での既習内容と重複していた」との意見を受け、学内の他カリキュラム（本学科の専門科目だと思う）との差別化を図るのかどうかを検討し、より新鮮で深みのあるコンテンツ構成へ見直す必要がある。

・食環境マネジメント学科（食物栄養学科）

①受講生の学習姿勢と授業運営

全体として、受講生の学習意欲は非常に高く、真剣に授業に取り組む姿勢が見受けられた。約 86%の学生が「意欲的・主体的に参加した」と回答しており、事前・事後学修についても、シラバスに沿って実行したとする回答が 8 割を超えていた。また、授業内容や進度については、約 94%の学生が「適切であった」「シラバス通りであった」と高く評価しており、計画的な授業運営をすることができた。

②授業内容の有用性と満足度

授業内容への満足度は非常に高く、約 94%の学生が「満足」と回答した。自由記述からは以下の点が評価された。

- ・**実践的な学び**：社会人としてのルールやマナー、社会人基礎力を在学中に学べたことが有益であった。
- ・**将来の可視化**：管理栄養士として活躍する先輩や外部講師の講話を通じて、卒業後の具体的な働くイメージを持つことができた。
- ・**自己成長への気づき**：自主性を持って苦手なことに挑戦するなど、今から取り組むべき課題が明確になった。

③コミュニケーションと相互作用

学生間でコミュニケーションが活発に行われる授業回が多くあった。

- ・**学生間交流**：約 92%の学生が、受講者間のコミュニケーションの機会が十分であったと回答した。
- ・**教員による対応**：教員からのアドバイスや、質問・発言に対する適切な対応についても、約 9 割の学生が「十分かつ適切であった」と肯定的に捉えている。
- ・**発表とフィードバック**：発言や発表の機会は公平に提供し、それに対する教員からのフィードバックも行ったことで、学習の深化に繋がったと思われる。

④総括

授業アンケート結果より、キャリアデザイン I は、将来の方向性を考えるための重要な一助になったと思われる。学生は自らのキャリアを真剣に捉え、具体的な目標設定や社会人基礎力の向上に意欲を示しており、シラバスの到達目標を概ね達成できたと考えられる。今後も沢山のことにチャレンジし、自らの可能性を広げていくことを期待する。

・子ども教育学科

総合コメント

学生生活の過ごし方や今後のキャリア形成について、各職業の実際について、OG や講師から直接聞くことができたことで、学生は自分事として意欲的に学修することができたと思われる。特にアルバイトをしている学生が多いためか、大人としてのふるまい方やコミュニケーションなどのスキル、知っておきたい労働条件などは真剣に講師の話を聞いていた表情が印象的であった。

学生の自由記述へのコメント

直近の学生生活への見通しや社会人、大人として身に付けたいスキルやふるまい方、考え方について、OG や講師から直接学ぶことが一番の学修になったと思われる。今後も学生のキャリア形成の一助になるような、視点が広がるような演習を計画していきたい。